

神の御心である救いの恵みは世界に及ぶ。
主なる神の御心に喜んで従おう。

〈ヨナの逃亡〉

神様は、預言者ヨナにニネベの町に宣教の命令を下しました。ニネベは、アッシリア帝国の大都市であります。当時、全世界の中心首都でもありました。単に大都市というのではなく、ニネベの町は、異邦人の代表であり、人間の築いた文明の象徴であり、高ぶりの象徴として神様はニネベの町に宣教命令を下したのであります。ニネベの悪を指摘し、神のさばきを下すというのであります。ここに神の救いが、単にユダヤの人たちだけではなく、全世界に及んでいることが暗示されております。

しかしヨナは、素直にニネベの町への宣教命令に服すると思いきや、正反対のタルシシュ行きの船に「人々に紛れ込んで」(2)、神の命令から逃れようとするのであります。なぜ、ヨナが逃亡してしまったのかは、4章2節に記されております。ヨナなりの理由があったので、ヨナの無言の逃亡に固い決意があったことがうかがえます。それゆえ、無言で服従したアブラハム(創世記22章)とは対照的であります。神の命令に逆らう預言者は、ベテルに住んでいた老預言者(列王記上13章)があげられますが、神の命令に反する、背くことがあれば何かが起こることを聖書は示します。それが、突然の嵐であります。

〈ヨナの危機〉

「主は大風を海に向かって放たれたので、大海は大荒れとなり……」(4)。主なる神が、このヨナの逃亡において、突然の大風を放たれました。神は、後に巨大な魚、とうごま、虫などを通して、ヨナの心を動かします。神が、それらをご意志通りに用いることにおいて、自然界の支配者であり、

その中でヨナを導かれることが描かれていくことになります。

船乗りたちは、神々に助けを求めて、貴重な積み荷を投棄し、緊急避難の努力に努めます。その間、ヨナは、のんきにも船底に降りて熟睡しております。ヨナは、ヤッファに下り(3)、船に下り(乗り込み)、いま船底に降り、やがて海の底にまで降ることになります。

船乗りたちは、「くじ」を引くことにおいて、犯人探しをします(7)。サイコロのようなものを投げて神意を知る方法(ヨシュア17:1、サムエル上14:41、使徒1:26)ですが、そのくじがヨナにあたります。そしてヨナは、「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ……」(9、10)と白状します。ヨナが白状することにおいて、ヨナの語る言葉と、そして神に逆らっているという現実の間に、矛盾が皮肉にも際立ち、うつろに響くのであります。ここではヨナが預言者として召されていながら英雄的な姿を失って、ならず者の様相を示しています。同時に、逆に異教の人々が、神の力と反逆がもたらす恐ろしい罰を深刻に受け止め、ヨナを海に投げ込むことにおいて、主なる神に忠実な信仰を表明するのであります。ここから分かるように、異教の人々が主を畏れ、誓いを立てたことにおいて、主の救いの恵みが世界に及んでいることを示しております。

ヨナは、己の思いにおいて主の御心に従おうとしませんでした。けれども、これから主なる神は、ヨナを呼び寄せて、悔い改めに導き、主の御心通りになさろうとします。全世界に及ぶ神の御心である救いの恵みは、神ご自身の御力において実現されます。たとえ預言者ヨナが逆らったとしても、実現されます。私たちは、何が主の御心であるかを知り、そして主なる神の御心を素直に喜んで従うものになりたいものです。(潮田 祐)

テキスト ヨナ書 1章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11

〔単元のねらい〕

今日から四週にわたってヨナ書を学ぶ。ヨナ書は小さな書物であるが、神の主権、救いの普遍性、そして罪人に対する神の恵みの奥深さ等、この書から学び得ることは数多い。とりわけご自身に逆らい、逃げ続ける預言者ヨナに対して神がいかに恵み深くあられるか、いかに豊かに、周到に彼の命のために備えてくださるかを心に刻みたい。わたしたちもまたヨナのように神に救われ、神に生かされ、神に守られ、神の救いに招かれている幸いなひとりひとりであることを今一度覚えたい。

「神さまのみ手」

今日から、ヨナという人のことを学びましょう。ヨナは預言者でした。預言者とは神さまの代理として、人々に神さまのみ言葉を語り伝えるために召され、立てられた人です。文字どおり神さまの口となって、忠実に神さまのみ心を告げることが、預言者のつとめでした。

神さまは、あるとき預言者ヨナに、ニネベに行って語れとお命じになりました。ニネベはアッシリアという国の都で、たいへん豊かで繁栄していた都市でした。けれどもアッシリアの人々は神さまのみ言葉に従わず、悪いことばかりをしていました。その罪と悪のゆえに、滅ぼされてもしかたなかったのです。

けれども神さまはニネベの都が滅びることをお望みにならず、罪の審判を警告し、ニネベの人々を悔い改めに導いて救おうとなさいました。そのためにヨナを用いようとなさったのです。

けれども、ヨナは神さまの命令に従いませんでした。預言者なのに、従わなかったのです。ヨナはタルシシュという港町に向かいました。この町は神さまが行けとお命じになったニネベとは反対の方角にありました。このようにしてヨナは神さまの命令に背き、神さまから逃げ出したのです。

ヨナはどうして神さまの命令に従わなかったのでしょうか。たぶん、神さまがニネベの人々を救おうとなさったことが気に入らなかったのです。

アッシリアは異教の国で、偶像の神々を拝んでいた国でした。神さまのみ心は広く、神さまの憐れみは偽りの神々を拝んで、滅びて行こうとしている人々にも及ぶものです。

ところがヨナは、救いの恵みは神さまの選びの民であるイスラエルにだけ与えられるべきであって、異教徒たちには与えられるべきでないと考えていました。ですから、ニネベに対する神さまのなさりかたが不満だったのです。神さまのみ心の広さ、深さが不満だったのです。それで、神さまのご命令から逃げ出そうとしたのです。反対の方向に向かっていったのです。

けれども、ヨナの逃亡は失敗に終わりました。神さまのみ手の及ばない場所の世界のどこにもありません。神さまのみ手から逃げられる人はだれひとりとしてありません。どこに逃げようとしても、神さまはそこにおられるからです。

タルシシュ行きの船に乗り込み、まんまと逃げおおせたと思ったヨナでしたが、何と嵐が起こって、船は海の真ん中で激しく揺れ、こなごなに碎け散ってしまうかと思われました。この嵐を起されたのは神さまです。

船に乗り込んでいた人々は、だれのせいでこの災難がふりかかったのかをつきとめるために、くじを引きました。くじはヨナに当たり、嵐の原因がヨナにあることがわかりました。そこで、彼の手足をしばって海に放り込んだのです。

海の真ん中に投げ込まれたヨナはどうなったのでしょうか。それは、また次週お話しします。

わたしたちもヨナのように、神さまに不満を抱いたり、納得できなかつたりということがあるかもしれません。神さまはわたしたちよりもはるかに大きなお方です。わたしたちはちっぽけな存在です。それにもかかわらず、わたしたちは自分の小さなはかりをもって神さまをはかり、神さまのなさが自分の思いにかなわないと知ると、不満を抱くのです。そして神さまに背き、神さまから逃げ出そうとするのです。

神さまのみ心は人間の思いをはるかに超えていることを覚えましょう。神さまのなさることはい

つも間違いがないことを知しましょう。いかなる時にも神さまに従う人こそ、真に幸いな人であることを覚えましょう。

わたしたちは神さまのみ手から逃れることはできません。どこに行っても、神さまはわたしたちとともにおられます。それはわたしたちにとって、たいへん幸せなことです。神さまはわたしたちによいことしかなさらないからです。わたしたちは自分の愚かさによって、しばしば神さまのよきみ心を知らないままに、神さまに背きます。けれども神さまはそのように愚かなわたしたちをも、忍耐強く恵みの道に導いてくださるのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] 詩編 139編7節

どこに行けば あなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。



〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たち一人ひとりを愛しておられます。ぼくたち私たちの思いを遥かに超えて導いてくださる、神様の御心に喜んで従うことについて、一緒に考えたいと思います。

〈展開例〉

みんな、神様に、このことをしなさいと言われたのに、いやだよと言って、自分勝手なことをしてしまったことはないだろうか（聞いて見る……）。

実は今日登場しているヨナさんという人は、神様のメッセージに背いて、全然違う方向に出かけてしまった人でした。

『さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。』しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。」(1-3)。

ニネベという町には、神様を信じない人々がたくさん住んでいました。ですから、神様はヨナさんに、「そこに行って、神様のお話をしなさい」と言われたのですが、ヨナさんは、ユダヤ人以外の人たちに神様のお話をするのが嫌で、タルシシュという町の方に逃れて行きました。

ところがです。神様は何でも知っておられます。「主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった」(4)。

ヨナが乗った船が大嵐にあったのです。船の乗

組員たちは、気が気ではありません。このままでは、みんな溺れて死んでしまいます。そこで、誰のせいで、こんな大変な目にあったのか、くじを引くことにしました。当時、人々は、くじによって神様の御心がかかると信じていたのです。

「さて、人々は互いに言った。『さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。』そこで、くじを引くとヨナに当たった」(7)。

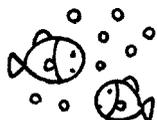
しかし、ヨナは自分では、なぜこんな大嵐が起ったのか知っていたのです。「ヨナは彼らに言った。『わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。』人々は非常に恐れ、ヨナに言った。『なんということをしたのだ。』人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。」(9-10)。

神様は、ぼくたち私たちに、一番良い道を用意してくださっているのです。でも、それが分からずに、自分勝手な道を行こうとしてしまうこともあります。

神様の御心は、ぼくたち、私たちが、どんなにそれを否定しても、何をしても必ず実現します。しかも、それがぼくたち私たちにとって、一番良い道なのです。神様を信頼していきましょう!!

〈お祈り〉

天の父なる神様。ぼくたち私たちの、思いを遥かに超えて、一番良いことをしてくださる神様に信頼して歩むことができるようにしてください。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神の御心である救いの恵みは世界に及ぶ。主なる神の御心に喜んで従おう。

〈展開例〉

今日はヨナさんのお話です。ヨナさんは神様のことばをみんなにお話しする預言者でした。

あるとき、ヨナさんは神様からお告げを受けます。「ニネベに行って神様のことを語りなさい」という神様のご命令でした。

ニネベという国は、その頃たいへん豊かな町でしたけれども、神様のことなどみんな忘れてしまっていて、自分たちの好き勝手なことばかりしていました。悪いこともいっぱいしていました。

神様はそんな悪い町ニネベをそのままにしようとはされず、ニネベという町と人々を救おうとお考えになったのです。

でも、ヨナさんは神様のこのご命令を不満に思いました。「どうしてあんなに悪いことをしているニネベの人々のために神様のみことばを伝えなければいけないのだろう?」「どうして神様はニ

ネベの町を救いたいのだろう?」ヨナさんにはどうしても分かりません。そしてヨナさんは、神様の命令に従わないで、逃げてしまいました。港に行き、ニネベではなくタルシシュ行きの船に乗り込みました。ヨナさんは遠くへ行行って、神様から隠れようとしたんですね。

え! 神様から隠れようとした? そんなことできるのでしょうか? できませんよね。神様はちゃんと知っておられます。私たちがどこでなにをしているのかちゃんと全部知っておられます。

神様は大嵐によってヨナさんの船を襲わせました。神様の命令に背いたヨナさんは、船の人たちに手足を縛られて嵐の海へ投げ込まれました。

さあ、ヨナさんは、どうなるのでしょうか? それはまた来週のお楽しみ。

〈お祈り〉

神様。あなたはわたしたちのすべてを知っておられ、いつも見守ってくださいます。あなたから逃げることをせずに、あなたの命令に従うことができますように。アーメン。

〈ワーク〉

○聖書を開きましょう

- ①神さまがヨナに行くように命じた都の名前は?
- ②ヨナが乗った船の行き先はどこ?
- ③海が大荒れになったとき、ヨナはどこで何をしていましたか?
- ④海はどのようにしたら静まりましたか?

【答え】①ニネベ ②ヤッフア ③船底で寝ていた ④ヨナを海にほうり込んだ



〈ねらい〉

神様の御心は人間の思い・考えをはるかに超えていることを知り、喜んで従いたいと思うことを学ぶ。

〈今日の聖書〉**★ヨナ書1章**

- ①聖書を読みましょう。
- ②物語を整理しましょう。

ヨナは何をしていた人ですか？
神様はヨナに何を命じましたか？
ヨナはどこへ向かいましたか？
神様はそれに対してどうされましたか？
乗組員たちは、ヨナをどうしましたか？
すると、海はどうになりましたか？

〈展開例〉

今日から、ヨナさんというひとのお話を聞きます。旧約聖書の後ろのほうに、ヨナ書という短い物語があります。

ヨナさんという人は「預言者」でした。神様のことばを「預かる」お仕事ですね。そんなヨナさんなのに、どうして、神様のことばに、すぐ従わなかったんだろう？ きっと、理由があったよね。

実は、ニネベの町の人々は、神様を信じていま

せんでした。偽物の神様を信じていたんだね。

だからヨナは、その土地へ行くことを嫌がりました。ヨナは、「神様に選ばれた民・イスラエルだけが救われるべきだ」と思っていたのです。だから、神様の優しい気持ちに反発したんだね。

みんなも「自分の思いや考えと、神様が喜ぶことがちがう」というときがあると思います。どうしてこんなことが起こるんだろう？ 自分ばかりつらいことがある。そんなふうにどんどん気持ちが悪くなるかもしれません。

だけど、神様のお考えというものは、そういう小さな私たち人間を、はるかに超えているのです。

ヨナは結局、神様が放った大嵐に遭い、船乗りに海へ投げ込まれてしまいます。ヨナはどうなってしまうのでしょうか？ それはまた、来週のお話。

私たちは、神様から隠れることはできません。いつも、共にいらっしやってくださいます。それは、とてもしあわせなこと。たくさん間違えてしまう私たちだけど、そんな私たちでも、神様が助けてくださいます。

〈祈り〉

神様。たくさん間違える私たちを、どうぞ恵みの道へお導きください。



対話の手掛かりとして……。

- ①ヨナは、預言者という務めを与えられながらも、神さまの命令に従うことが嫌でした。私たちも神さまを信じていながら、御言葉から離れたいという誘惑がいつも襲ってきます。そのような経験について語り合うことができないでしょうか。例えば、毎週日曜日に教会に行くことの中にも、どこか本当に喜んでいない自分があるかもしれません。私はもっと他のことがしたいのにというふうに……。しかしその一方で、神さまの声が聞こえてくるのも事実です。自分の声と神さまの御声の狭間で葛藤している子どもたちは思っている以上に多いのです。
- ②そのような子どもたちに、「それはダメ」とか「そんなのは神さまの子どもではない」というふうに一方的に裁いても何の解決にもなりません。そうではなく、既に自分の心の隅っこで響き始めている神の言葉に対して、もっと肯定的に見つめ直すことへと導いてあげることはできないでしょうか。神の言葉と自分の心がぶつかり合っているということは、大きな恵みだと思ふのです。
- ③神さまからの逃亡を企てたヨナでしたが、結局は、神の命令どおり、ニネベに行くこととなります。この出来事をおして、ヨナは神の言葉に捕らえられた経験をするのです。神の言葉から逃れられないというのは、決して恐ろしいことではありません。神さまに捕らえられるというのは、確かに自分が思っていたような道を進むことができないということになるかもしれませんが、それはイコール不幸ではないのです。私も牧師になりたいと思って、牧師になったわけではありません。しかし、神さまに捕らえら

れ、召されて歩んでいるこの道を不幸だとは思っていません。牧師として働かなければ知り得なかった神さまの恵みをたくさんいただいていることに感謝しています。そしてこれからも祝福して下さると確信しています。教会学校の教師の方たちの中にも、かつて自分が想像もしていなかった道に導かれ、そこで与えられた恵みを語ることはできるのではないのでしょうか。信仰の先輩たちがどのように生きてきたのか、その証しを聞くことを、きっと子どもたちは楽しみしていると思うのです。

- ④神さまと自分の思いがぶつかるところで、神さまに従うことへと導かれればよいのですが、背を向けて離れ去ってしまうこともあります。その結果、ヨナが嵐の海に投げ込まれたような苦難を経験することもあるでしょう。しかし、それは神さまに背いたがゆえの罰や裁きというよりも、自分とは何者であるのかを思い起こさせるためのものです(9節)。そして、私たちの神さまは、ヨナを見捨てられなかったように、罪深い私たちをも救い出してくださるお方であることを知るようになるためです。この神さまを大きな御手の中で、悔い改めに導かれ、再び神さまの御心を喜んで生きる者へと変えられていくのです。
- ⑤ヨナの姿は、不思議にも自分の姿と重なり合うことが多く、子どもから大人まで喜んで読まれる聖書物語のひとつです。しかし、ヨナと自分は似ているという共感だけに留まらず、そんなヨナや自分に、神さまはどのように関わってくださり、何をしてくださったのかということに心を向けるならば、更に新たな発見があるはずですよ！

